有形文化財（考古資料）有毛太郎坊山遺跡経塚出土品 一括

（答申）

令和５年１０月１７日

北九州市文化財保護審議会

1　文化財の区分

有形文化財（考古資料）

2　名称及び員数

有毛太郎坊山遺跡経塚出土品　　一括

3　所有者氏名及び住所（保管場所）

北九州市教育委員会

（北九州市立自然史・歴史博物館　北九州市八幡東区東田二丁目４番１号）

4　内容および法量

（1）　経塚１出土遺物（集石１より出土）５点

ア　青銅製経筒　　底部径 13.3（推定）cm、胴部厚さ 0.06cm
　　（2 片）　　蓋直径 14.6cm、擬宝珠鈕直径 2.6cm、高さ 1.5cm
イ　湖州六花鏡　　現存長 10.14cm、厚さ 3mm、鈕 1cm×0.4cm の長方形
ウ　棒状鍛造鉄器　現存長 6.0cm
エ　青磁小形壺　　口縁部径 2.6cm、胴部最大径 5.8cm、底径 2.8cm、高さ 4.0cm
オ　台座石　　全長 23.5cm、幅 20.0cm、厚さ 3.2cm

（2）経塚２出土遺物（集石３より出土）８点

ア　青銅製経筒　　筒身径 7.2cm、蓋径 12.0cm、高さ 23.7cm、器壁厚さ 0.3cm
　　台座底径 11.7cm、台座高 1.2cm
　　笠蓋直径 12.0cm、高さ 1.3cm、擬宝珠鈕直径 1.3cm、高さ 1.8cm
イ　経筒外容器　　蓋直径 26.7cm、胴部最大径 26.2cm、底径 25.0cm、高さ 27.4cm
　　(土師質蓋付円筒)
ウ　紙 本 経 片　　計測不能
エ　鉄　小　刀　　全長 25.1cm、刃部長 22.0cm、刃部幅 3.1cm、厚さ 0.6cm
オ　青銅製刀装具　現存長 2.9cm、幅 0.8cm、厚さ 0.3cm
カ　鉄　　鏃　　現存長 6.0cm、幅 3.2cm
キ　青白磁合子　　胴部最大径 6.2cm（推定）、底径 4.5cm（推定）、高さ 3.6cm
ク　ガラス小玉　　34 点　直径約 0.6cm、口径 0.2～0.3cm

5　由来・徴証等

（1）　出土地

北九州市若松区大字有毛 781 番地外

（2）　出土遺構

有毛太郎坊山遺跡は、標高約 50mの低位の有毛丘陵上に所在する弥生時代及び中世の遺跡群で、二度にわたって発掘調査が行われた。昭和 61 年(1986)の第 1 地点発掘調査では A 区、B 区、C 区の 3 地区に分かれ、A 区で 14～15 世紀代の 19 基の中世墓、B 区で平安末～鎌倉初期と推定される中世の集石墓 1 基、C 区で弥生～中世までの土壙墓や貯蔵穴、建物跡や配石遺構、集石墓などが発見されている。平成 6 年(1994)に行われた第 2 地点発掘調査では、C 区に連続すると考えられる調査区より、弥生時代の土壙墓 1 基、石蓋土壙墓 7 基のほか、2 基の経塚に伴う集石遺構が 3 基発見された。

ア　経塚１

丘陵西側に形成された石積み遺構で、直径 1.8～1.6m、深さ 0.5mの円形土坑を掘削し、その中央部を 0.4×0.35m、深さ 0.4mに円形に掘り込んだ二重土坑である。一段目土坑内には人頭大の角礫が詰め込まれ、この集石の高さは東部で土坑上面より若干高く、小山状を呈していた。二段目土坑内面には厚さ 7ｃｍの粘土壁が形成され、床面には平石が２個据えられ、その上面に 20×23cm、厚さ 3cm の楕円形の砂岩製の平石を台座石として置き、その上に青銅製経筒を据えたとみられる。

イ　経塚２

丘陵北側に形成された石積み遺構で、直径 1.15m、深さ 0.4mの円形土坑を掘削し、その中央部を直径 0.5～0.6m、深さ 0.35～0.3mに円形に掘り込んだ二重土坑である。一段目土坑内には人頭大の石が詰め込まれ、この集石の高さは地表面から 0.4m程度まで積まれている。二段目土坑内側には大型の石を貼り付け、底面に直径 52cm、厚さ 18cm の円石を台座石にして、その上部に土師質の経筒外容器が据えられていた。

（3）　指定資料の特徴

ア　経塚１出土遺物

青銅製経筒は腐食、破損しており、蓋と一部の胴部と底部が残るのみである。経筒は 2 枚の銅板を半筒形に丸めて鋲留めした大型のものである。経筒外面に鍍金の痕跡が残ることから、本来は全体に鍍金されていたと考えられる。円形の底部は一部が残存する。蓋は被蓋形式で、銅板を叩き延ばして整形したもので、端部を折り曲げ 1cm ほどの扁平な縁を作り出し、端部下に身と重ね合わせるための 8mm の下がり部を作る。擬宝珠鈕には四葉座が伴う。

その他の出土遺物である鏡と合子は、いずれも上部土坑の北側集石下から出土した。青銅製鏡は全体の３分の１が残存する湖州六花鏡で、銘文は明確には読み取れないが、一部に 2×3cm の長方形の囲みがみえる。破損端部付近が 3cm ほど

くぼんでいる。

合子は青磁の小型壷で、黄灰色の釉が底部外面以外にかかっている。蓋は出土していない。棒状鍛造鉄器は鉄鏃片と思われる。

イ　経塚２出土遺物

経筒外容器は土師質の円筒で、身の浅い皿状の蓋と対をなす。蓋上面には糸切りの痕跡がみえ、両者とも全体にしっかりした作りで、焼成は良好である。身の側面には焼成後にあけられた直径 3cm 程度の穿孔がみられる。

青銅製経筒の胴部は竹を模した形状で、7.3cm 間隔で上・中・下の三段に突線紐帯が鋳出されており、上下段は突線紐帯が２条、中段は３条である。胴部外面には数箇所の不規則な傷がみられ、ＣＴスキャンにより鋳掛による修復痕が確認できる。笠蓋は被蓋形式で、やや扁平な形状をしており、緩い甲盛をもつ。底板は秋草が鋳込まれた中央に鈕のある和鏡で、はめ底である。内部には塊状に団結した紙片が多数入っており、判読不能であるが紙本経の経巻と考えられる。

青白磁合子は身と蓋がセットになった景徳鎮窯の印籠型で、状態は良好である。その他、鉄小刀、鉄鏃、青銅製刀装具などが出土した。

（４）　経塚の築造時期

経塚２出土経筒は、12 世紀前半である永久６年（1118）の紀年銘を有する２例の市内出土資料（金山谷・前ベラ山経塚出土例、ハリヤ経塚出土例）と類似しており、青白磁合子についてもその形式から同時代と考えられる。よって経塚２の築造時期はおおむね 12 世紀前半とみられる。

また、経塚１についても、経塚の築造状況および出土遺物の内容から、経塚２とほぼ同時代と考えて差し支えない。

６　指定理由

本経筒は、経塚１出土の経筒が２枚の銅板を組み合わせた太身の造りで、全体に鍍金を施す優品である。

また、経塚２出土の経筒は一般的に北部九州でみられる鎮国寺型と呼ばれる造りで北部九州地域でも特に遠賀川流域を中心に見られるタイプである。経塚２出土の経筒は、市内の金山谷・前ベラ山経塚出土例やハリヤ経塚出土例の紀年銘経筒（永久６年（1118）銘、共に小倉南区出土）ともきわめて類似しており、当地において経筒製作に携わった鋳物師集団の姿に迫ることもできる好資料群といえる。

北九州市内から発見された経筒は９点が知られるが、いずれも明治期の発見や、伝世品などが多く、埋納時の状態は不明である。よって現状では、考古学的な発掘調査を経て出土し、共伴遺物や遺構の形状、周辺の遺跡の状況が詳らかなものは本例のみであり、高い学術的価値を有する。また青白磁合子をはじめとする共伴資料についても、経筒と同時代性の高い資料として考古学上重要であるため、経塚出土品として指定し、共に保存をはかりたい。